

# 巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 別府 春海

京都文教大学人間学研究所は1996年京都文教大学開学と同年に発足した。研究所は大学の母体である家政学園の建学の理念に則り、人間学の総合的な学術研究を行うことを通じて文化の発展に寄与することを目的としている。この目的を達成するために研究所は広範囲にわたる事業をその規定で設定している。それは次の通りである。

- (1) 学際的研究調査およびその成果の発表
- (2) 受託研究調査事業
- (3) 研究会および研修会の開催
- (4) 教員の研究業績の収集、保管、提供および閲覧
- (5) 研究報告その他出版物の編集発行
- (6) 公開講座ほか生涯学習に資する事業の実施
- (7) 関係学術組織・機関等との協力
- (8) 研究のために必要な資料の収集および整理
- (9) 教員の国内、国外での研究、研究発表の促進
- (10) その他前項に定める目的を達成するために必要と認められる事項

(1)の「学際的研究調査」では本学の中核が臨床心理学と文化人類学との二本立てであることをわきまえ、両分野の学際的研究に力を入れてきた。例えば、研究所主催の共同研究班では必ず臨床心理学科と文化人類学科から研究責任者を出し、研究班メンバーも両学科から参加することを義務づけた。

これらの研究班はしばしば研究会を開き、大学内外の研究者と論をたたかわせている。又、研究所では学際的シンポジウムや講演会を開催し、両学科の統合に努力をしている。例えば、

心理人類学者星野命教授（本研究所客員研究員）及び、コミュニケーションを専攻テーマとする名古屋市立大学野村直樹教授、両氏の講演が深層心理に立ち入ると同時に文化人類学の領域にも深くかかわるものであることは、本巻掲載の講演録を一読いただければ明らかだろう。

本研究所は多彩な事業を主催してきたことも銘記したい。その一例として鶴見和子シンポジウムをとり上げたい。上智大学社会学名誉教授鶴見和子氏はその蔵書を一括して当大学に寄附して下さった。開学間もなく、蔵書もまだ不十分な当学図書館にとってまたとない幸運であった。研究所は鶴見教授の寄附を記念し、又感謝する意味でシンポジウムを二回にわたって開催した。ここで異色だったのは、そのパネラーが生命誌学者中村桂子氏、歌人道浦母都子氏、人形作家高橋千鶴子氏、舞踊家西川千麗氏、鶴見氏の主治医上田敏氏と、このように学問のかたを破る構成だったことである。講演会場は200名定員で、ほぼ同数の申込者にはお断りをしなければならぬ程盛大だった。

本研究所はこのように一色変わった事業を催すと同時に、その方面で名を馳せる人物を招くことにも心掛けて来た。上記鶴見和子シンポジウムの歴々としたパネラーですでにこのことが察しられる。鶴見和子に関しては英語でもう一つシンポジウムを開いた。その準備として武者小路公秀氏、川勝平太氏等に参加いただいた。又シンポジウム「グローバリゼーション論の中の日本の位置」ではグローバリゼーション論、又、日本研究の第一線をいくM. フェザーストン、U. ハナース、M. モーラン、E. ベンナリに参加していただいたことは特記すべきである。

このように開所以来現在までに上記諸事業のうち、(2)、(4)、(5)、(6)を除く他の事業は何らかのかたちで主催してきた。今まで手がけなかった事業の中で特に重要なのは(5)の「研究報告その他出版物の編集発行」である。研究所の関与してきた研究調査は巻末の「事業報告」で見られるように多岐にわたり、多量でもある。種々の理由で今まで研究所はこれらの研究業績を刊行する機会がなかった。今回過去3年の業績を一括してここに刊行し研究成果を世に問うことになった。

紙面の制限もあり、研究成果を全部出すことは不可能なのでここでは残念ながら一部を割愛せざるを得なかった。場合によっては事業項目を全面削除した。例えば大学開学に当って開学記念シンポジウムを研究所は主催した。それは当時同志社大学神学部教授の樋口和彦(現、当学学長)を司会者とし、国際日本文化研究所所長であり当学顧問である河合隼雄教授と研究所所長である別府の発表による、「贈りものの人

間学」をテーマとするシンポジウムであったが、これは割愛することにした。

又掲載したシンポジウムや講演録も、紙面の都合上Q&Aは極力省略ないし、割愛せざるを得なかった。討論に入り、思いがけないところで斬新なアイデアが提出されることは私たちよく経験するところで、その部分の割愛は場合によっては身を切る思いだったことを記録したい。

ここに人間学研究所の成果を発表することによって、研究所の真価を学の内外に問うことにしたい。

なお、本号の作成にあたっては滝口俊子副所長が実質「編集委員長」として作成初期より陣頭指揮をして下さり、また大杉高司助手は実行委員として詳細なところまで眼のとどく仕事をして下さいましたお二人の貢献は大きい。その他の編集委員にも惜しみなく協力をしていただいた。本号はこれら編集委員各位の努力のたまものである。所長としてあらためて謝意を表したい。